審査の結果の要旨

氏名　小野田亮介

本論文は、マイサイドバイアス(my-side bias)と呼ばれる、意見文を産出する際に自分に有利な賛成論のみで意見文を構成する傾向に注目し、その生起過程に関連する要因を検討し、このバイアスを克服するための支援方法を考案しその効果を検証した研究である。論文全体は５部 13 章から構成されている。

第Ⅰ部第１章では、先行研究を概括し、マイサイドバイアスが発達や学習経験により自然に克服されるバイアスではなく、克服を目的とした指導が必要であることを示している。第２章では、文章産出と認知バイアス研究から、意見文スキーマと理由想定の２要因がマイサイドバイアスに関連する要因であることを導き出している。そして第３章では、マイサイドバイアスの生起メカニズムを意見文スキーマと理由想定の観点から検討し、克服支援方法を考案して効果検証するという目的とそのための研究枠組みと方法を論じている。

第Ⅱ部第４章(研究１)では、大学生 164 名を対象に相対評価法と独立評価法を比較し、相対評価法においてマイサイドバイアスを克服した意見文が高く評価されることを明らかにしている。第５章(研究２)では、大学生 100 名を対象に意見文読解直後の即時評価だけではなく、遅延評価においても同様の結果が支持されることを示している。第６章(研究３)では、高校生 60 名を対象に意見文の説得力評価と意見文産出の関連を検討し、マイサイドバイアスを克服した意見文を説得的と評価する学習者は意見文産出でもバイアスを克服した産出を行うことを示し意見文評価が意見文スキーマに影響する点を明らかにしている。

第Ⅲ部第７章（研究４）では、専門学校生 106 名を対象に理由想定と書き手の立場との関連を検討し、俯瞰的・批判的な思考が求められる弁護士や検事のような役割を与えることで反論想定の偏りが克服できることを示し、第８章（研究５）では、大学生・専門学校生 324 名を対象に、立場事前選択群、事前選択強化群、事後選択群の群間比較研究から、相手に分かるように伝えられる役割の附与という立場選択が多様な反論想定を抑制することを明らかにした。第９章(研究６)では、大学生 115 名を対象に立場を固定化した学習者は反論想定に迷いが生じにくく、反論に消極的な方略を取ることを示している。

第Ⅳ部では、第Ⅱ、Ⅲ部の結果をもとにして、第 10 章(研究７)では、高校生 125 名を対象に目標達成支援介入が反論想定と再反論の産出促進の効果をもたらすこと、また第 11 章(研究８)では、小学校中学年児童 30 名を対象に、目標達成支援介入が有効であること、第 12 章(研究９)では、小学校中・高学年 90 名を対象に意見文産出時のつまずきのポイントを明らかにし、目標支援達成介入の効果検証を行っている。そこから、本支援方法が児童期以降の児童生徒の学校教育場面において実際に有効な方法であることを示している。

そして、第Ⅴ部第 13 章では、上記９つの実証研究を総括し、本研究がマイサイドバイアス研究や作文研究に与える示唆や意義および今後の課題と展望を総括している。

本論文は、説得的な意見文産出の支援に関し、その過程を精緻に実験的方法を用いて明らかにし新たな支援方法を考案した、教育実践にも寄与する可能性をもった論文である。支援介入過程への着眼点や効果研究法の考案において独自性が高く、手堅い方法で教授学習分野の心理学研究に新たな視座を示した点が、高く評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあると判断された。